レフトハンド

LEFT HAND

中井拓志

Takushi Nakai

レフト

中井拓志
Takushi Nakai

江苏工业学院图书馆
藏书章

LEFT
HAHA

角川書店

著者略歴

'71年、福岡県生まれ。
立命館大学経済学部中退。現在、京都在住。'97年、本作品により第4回日本ホラー小説大賞長編賞を受賞。

レフトハンド

平成九年六月三十日　初版発行

著　者――中井拓志
発行者――角川歴彦
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―一三―三
〒102　振替〇〇一三〇―九―一九五二〇八
電話／営業部〇三―三二三八―八五二一
編集部〇三―三二三八―八四五一

印刷所――図書印刷株式会社
製本所――株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本は小面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
© Takushi NAKAI 1997. Printed in Japan.
ISBN4-04-873057-6 C0093

レフトハンド

装丁／角川書店装丁室

© LUCIANA NAPCHA／PHOTONICA

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

序

今では休息室として使われている小会議室で紙コップのコーヒーを飲み干すと、影山智博はよっしゃと立ち上がり、廊下へ出た。

隣の研究室の扉が半開きで、若い研究員たちの働く気配が漏れていた。足音と、小声の相談。中にいるのは三人だと予想がついた。一人の足音がやたらこもっているので、ゴム装備を着ているのだろう。外から派遣された連中だ。

影山は半開きの扉へは向かわなかった。背を向けると、白衣をこすらせながら反対方向へ進んだ。

その先で廊下は防火扉に封じられていた。廊下をふさぐ一枚の大きな鉄板と、その鉄板を通過するための人一人分の鉄扉。影山は鉄扉をくぐった。扉は派手な衝突音を轟かせてまた閉じられていく。前方には再び同じ防火扉が閉じていた。この廊下はあと二度、同じ防火扉に遮られた。この四連の防火扉を次々突破していくのが、影山は好きだった。風を切るのに似ている。後ろの鉄扉がまだ騒いでいるうちに次をくぐるのがいい。きっとさっきの隣室の研究員たちは、鉄扉の反響がひとつずつ遠くなるのを聞いているだろう。

四枚目をくぐると、蒼暗い地下三階中央ロビーに出た。暗いのは、明かりというものが緑の非常灯しか灯っていないからだった。ほかはすべて落ちていたし、今後直してくれる電気工が来ることもなさそうだった。中央ロビーは東西南北からの廊下が交差し、フロアの根幹部にあたった。影山の来た廊下は北寄りの廊下である。どの廊下の先にも研究設備があったが、今でも動いているのは北の研究室だけだった。

中央ロビーにはエレベーターがあったが、それはもうひと月以上止まっていた。影山は階段へ向かった。そこも明かりが死んでいた。階段には各階の空調設備の機関音が集まり、それが滲むように響き渡っていた。影山は白衣のポケットに懐中電灯を用意していたが、使わなかった。懐中電灯は、足元を照らすために用意したのでは

なかった。他に重要な用途があるのだ。
地下二階、地下一階、いずれも闇に沈んでいた。その闇へ、影山の革靴の反響が吸い込まれていく。ここにはもう誰もいない。何かがいることは確かだが。もとは誰かのものだった、何か。それがこの闇の裏にうごめいている……。
地上一階に着いた。ここでは階段と中央ロビーとの間が防火扉で遮断されていた。ここの防火扉は、地下三階の四連の防火扉とは少し様相が違った。今は闇に沈んでいるのでわからないが、懐中電灯を振り向ければ、ここの防火扉が厚い溶接で壁に固定されていることがわかった。防火扉を通過するための鉄扉の方も、向こう側から十三もの鍵で封じられていた。研究棟を出るにはこの扉しかない。が、影山がこの扉を通過することは、おそらくもうないだろう。
影山は地上二階へと昇った。
この研究棟は二階が最上階だった。地上二階も中央ロビーとの間が鉄扉で遮断されていたが、ここには鍵や溶接はなかった。影山は、ここで用意していた懐中電灯を灯した。わずかに開いた鉄扉の隙間から、電灯の光を差し込ませる。もし連中がそこにいれば、光を嫌ってひと騒ぎするはずだ。鉄扉の向こうに騒ぎは起こらなかった。影山は鉄扉をくぐる。くぐったあとの鉄扉は慎重に閉じなおした。ここでは、地下三階のようにガシャンとやるわけにはいかなかった。連中は音に敏感なのだ。刺激すると狂ったように暴れだし、逃走するか、逆に襲ってくる。
地上二階の中央ロビーはイヤな臭いが充満していた。影山はその臭いのことを考えないようにしながら、早足に中央ロビーを横切った。途中干涸びた汚物を蹴飛ばしてしまったが、影山はその正体を考えないようにした。南に閉じた鉄扉を通過すれば、長い廊下が真っすぐ南へ伸びていた。影山は懐中電灯の明かりを、廊下の先へと差し向ける。
途端に、廊下の彼方にじたばたとあわてた物音が聞こえた。
影山はヒクリと肩を震わせる。物音は一度きりで消えた。影山は暗く静まり返った廊下に、電灯のスポットをゆっくりと滑らせた。スポットが十五メートルほど先の闇を巡ったとき、その中に妙に艶かしい何かが過った。光にかすめられたその何かは、途端にどたばたと大騒ぎして、闇の彼方へと駆け抜けていった。

このとおり、連中は光を嫌うのだ。影山が懐中電灯を用意したのは、そのためだった。

廊下を行き着くとラウンジだった。白い長テーブルが十数卓並んでいた。かつてここは、それは賑やかなものだった。それから地獄に変わった。そして今は闇に沈んでいた。闇に紛れて、連中が潜んでいるはずだ。このラウンジの唯一の明かりは、手前の角にある自販機コーナーの照明だった。影山はそこへ小走りに駆けつける。連中は光を嫌うので、そこは安全地帯だった。影山はこれでひと安心し、白衣のポケットに小銭をジャラジャラ言わせながら、ハンバーガーの自販機を探した。

進展のない研究活動から抜けて、連中のうごめく建物を地上二階まで上り、ここで大好きなバーガーを食う。いつのまにかこの小冒険が影山の大切な息抜きになっていた。

自販機へ小銭をたたき込みながら、もうこの自販機以外に小銭を使うこともないだろうと思った。軽くボタンを押すと、ブーと余計なブザー音が轟いて、受け口へごろごろとバーガーが転がり落ちてきた。それに刺激されて、闇のラウンジのどこかを連中の一匹が駆け抜けた。影山はギクリとしたが、光の中にいれば心配はなかった。こうしてギクリとするのも安心するのも、影山の小冒険のスケジュールの一部になっていた。バーガーは受け口にあったが、まだ取り出せなかった。カチカチに凍っているのでこれからレンジで解凍するのだ。ここのバーガーは評判よかったが、解凍に三分かかるのが難点だった。おかげで一時は、昼休みごとに行列ができた。担当セクションごとにバーガーを食える曜日を割り当てて解決したあたりは、まるで大学の自治会か何かのようで、研究者集団らしいと思った。影山がそのルールを最後に守ってから、もうひと月以上経った。列を争う仲間もいなくなった。この自販機のバーガーも、いい加減切れる頃だろう。影山は自販機のウインドウの中のバーガーの模型を見つめながら、表示が「売り切れ」になる瞬間を想像した。そのときにはきっと、ちょっとがっかりするだろう。あるいは、肩の荷のおりた気にでもなるのだろうか。

影山ははっとした。バーガーの模型を見ていたつもりが、いつのまにかウインドウに映った自分を見ていた。

ウインドウに映った影山智博は、白目が気味悪く黄ばんでいた。肌は枯れて、どす黒く変色している。影山は五十過ぎだったが、肌の変色のせいでもう歳の頃もわからなかった。すべては、『カクテル』の副作用である。

『カクテル』の副作用で、もう影山の身体はズタズタだった。そのうち腎臓が破れるなり中枢神経がいかれるなりするだろう。といって『カクテル』の使用を止めれば、たちまち仲間たちと同じ運命になる――かつてはバーガーの列を競い合った、仲間たち、そして今では、ここへの来すがら蹴飛ばした汚物たち……。

連中はみな『脱皮』した。影山が『カクテル』の使用を止めれば、彼もまた同じ運命をたどることになるのだ。

白髪頭が我ながら痛々しかった。こんなことになる前は、白髪など数えるほどしかなかったのに。この総白髪は『カクテル』の副作用なのか、心労のせいなのか。

「バーガーを、お取りください。バーガーを、お取りください」

自販機が呼んでいた。バーガーに合わせてブラックコーヒーを購入し、影山はラウンジでのひとときを楽しんだ。ときどき床を、連中が駆け抜けていった。

やすらぎのひとときを終えると、影山はまた懐中電灯に守られながら廊下を引き返した。途中、連中の一匹が汚物を引きずっていくのに遭遇した。そいつはよっぽど欲張りらしく、自分の身体の何倍もある汚物を引きずっていた。普通は腕なり足なりを食いちぎって運んでいるものなのだが、そいつはどこも分解せずにそのまま引きずっていた。あれを一匹で食うつもりなのだから、かなりの食いしん坊だ。懐中電灯で照らしてやると、食いしん坊は猛烈に慌てた。五本の足が床のパネルを勢いよく掻く。カリカリと身の毛のよだつような音が、廊下に響き渡った。しかし獲物が重いうえに廊下が滑るので、食いしん坊は思うように走れないのだった。

影山は嘲ら笑った。どこの世界にもこういう間抜けは存在するものだ。いじめるように、食いしん坊を懐中電灯で照らし続ける。

生白いスポットの中に浮かんでいるのは、死体と、左腕だった。左腕が、死体を引きずって這っていた。

1

国際資本「テルン」が日本に展開する製薬会社「テルンジャパン」の、日本での開発研究の中心であるテルンジャパン埼玉総合開発研究所。その営業担当の職員が、都内のアルバイト情報誌七・八月特集号に、子会社名義で人材募集の広告を出した。

募集するのは二十～二十五歳の健康な男女。七月の終

わりから八月いっぱいまでスケジュールを空けられる者——ということは必然的に、他に定職のないものに限られる。学歴は問わず。特別な資格は不必要。報酬は百二十万。

仕事は、発売前の新薬のモデル。

広告に対する反応は、すこぶる悪かった。どうやら二十代の健康な若者に夏中研究室にこもれというのは、死ねといっているようなものらしい。報酬百二十万もバカンスの前には霞むのだ。結果、七月中旬の面接にあらわれたのは二十人に満たなかった。

ところで、夏をつぶして百二十万荒稼ぎを目論む都内在住の連中とくれば、社会的地位は絞られた。フリーターあるいは学生、一人暮らし、付き合い悪し。これが、実は広告を出した担当の狙いどおりだった。ちょっとばかり姿を消してもすぐに騒ぎにはならないような連中。それが、今回の人材募集の裏の条件だったのである。

この条件に沿って、希望者は十一人に絞られた。健康診断の結果から十一人は五人に絞られる。少なくとも二人、できれば四、五人集めろという指示だったので、人材募集は成功した、かに思えた。

ちょっとばかり姿を消してもすぐには騒ぎにならないような若者とは、同時に移り気でいい加減な連中でもあった。決定の通知を受け取って実際契約にあらわれたのは、一人だけだったのである。結局いったんは落とされた一人が急遽合格に引き上げられ、なんとか二名が確保された。

まあ、二人揃えば十分だろう。たった二人では新薬のモデルとしてどれほどのデータが採れるのか、疑問ではあるが。しかしそれは四、五人でも似たようなものだったし、そもそも、この二人は実際のところ新薬のモデルではないのだから……。

モデルに決定したのは、一人は桜雄次。履歴書には二十二歳の大学生となっており、免許証と学生証がそれを証明した。もうひとりは、遠山里々子。急遽合格に引き上げられたのは、こちらである。履歴書によれば二十歳の専門学校生ということになっていたが、免許証はなく学生証は不携帯だった。本当に二十歳かどうかは怪しかったし、専門学校が夏中休みになるものかどうかも怪しかった。そこが引っかかっていったんは落とされた人材だったが、二人目の確保が必要になったところで履歴書は鵜呑みにされた。

二人は契約書にサインした。七月下旬に埼玉研究所へ

送られ、影山智博の手元へ渡されることになる。

2

埼玉県にある株式会社テルンジャパン埼玉総合開発研究所は、広大な敷地を有していた。東京ドームで言えば二十三個分にあたるらしい。

南門が研究所の正門だった。正門をくぐると、手を尽くされた見事な緑の生け垣が来訪者を迎えた。製薬会社らしい演出である。生け垣は来訪者を本館と呼ばれる南棟へと案内した。南棟は清潔感溢れる真っ白な建物で、ドーム屋根を持った円形の建物を中心に置いているのでプラネタリウムのようにも見えた。南棟では研究活動は行なわれなかった。来訪者を心地よく迎えたり、ちょっとした資料を陳列してみせたりするのが南棟の役目だった。学術イベントやプレゼンテーションなども、ここの大会議室で行なわれた。南棟はここ埼玉総合開発研究所の、顔なのだ。だから南棟の正面には清潔感溢れる噴水が構えられ、噴水の中央には、

とシルバーを立体的に鋳取ったモニュメントが輝いていた。デザインはもちろん、テルンジャパンのロゴマークである。

南棟の裏に回ると、滑走路かと見紛うほど幅の広い舗装路が、まっすぐ北へ伸びていた。パームツリーの生け垣が中央分離帯の役目をしていたが、埼玉のパームツリーは枯れて痩せて見るも無残だった。この舗装路を挟んで、研究所は東西南北四つのエリアに区分けされ、それぞれ趣の違った役割を請け負っていた。西は一般事務から資料整理、所員の厚生から悩み相談など、研究所と所員の総合管理を受け持つエリア。東は生産プラントが主だったが、埼玉研究所は生産が目的ではなかったのでそう大規模ではなかった。北がもっとも重要な、新技術・新製品の研究開発の場で、十数の研究チームが研究室を設けてそれぞれのプロジェクトを進めていた。ここ埼玉総合開発研究所の頭脳といえば、この北エリアということになるわけである。北エリアの頭脳が東エリアのプラントを利用して研究・開発プロジェクトを進め、西エリ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

アがパトロンを務めて南は出資者にニッコリ微笑む。研究所はそういう仕組みだった。

施設が巨大なので、コンピューター網のチェックや機密管理、資料管理、施設の警備、所内での物の運搬などには外部のサービス業者が利用されていた。コンピューター網や情報管理には東都データサービス、警備にはオリオンサプライ、細かいところでは、微生物を扱う研究棟の空調を監視する東海エアロサービスというものもあった。ところで、この埼玉総合開発研究所の北エリア三号棟は、六月上旬突如閉鎖に追い込まれ、今では自衛隊員らしき得体の知れない連中に四六時中監視されていた。北エリア三号棟は地上二階地下四階の建造物なのだが、地上部分の窓という窓に外から鉄板が溶接され、つぎはぎされた分厚いビニールが建物全体をすっぽり包んでいた。まるで配達されてきたばかりの洗濯機のようだった。

七月三十日、午後八時。

南棟の裏から北へと伸びる広い舗装路は、日暮れ前に襲ってきた猛烈なスコールのせいでアスファルト臭さが立ち籠めていた。中央分離帯の代わりをしている生け垣に、二人の男が突っ立っていた。ひとりはスラックスにゴルフ用のポロシャツ姿で、腕組みして南を眺めていた。五十過ぎだが健康そうな赤ら顔で、頬骨が岩のように張り出していた。米倉隆三、ここテルンジャパン埼玉総合開発研究所の副所長、なのだが所長は梅雨のさなかにどこかへ逃げてしまったので、今では彼が事実上の所長だった。

もう一人の男は、米倉の背後に気弱に背をまるめて立っていた。八木康夫、テルンジャパン埼玉総合開発研究所北エリア管理部の一職員、だったのはひと月前までの話で、今では所長と前後して姿を消した北エリアチーフに代わってチーフ代理を務めていた。四十半ばの、頬の痩けた出歯の男で、おそらく子供の頃はネズミ男か、あるいはネズミと呼ばれていただろう。そう呼ばれても怒りそうにない、情けないハの字型の眉毛をしていた。

その八木は、先程から米倉の背中で延々愚痴をこぼしていた。

「……これはもう、ただじゃ済みませんよ」

米倉は無視して南を眺めている。

「私はこんな無茶な話は知りません」

生温い風がボボボと道路を駆け抜ける。風は湿気をたっぷり含んで、嫌気がするほど重苦しかった。

「これじゃほとんど犯罪じゃないですか」
八木はちらりと米倉の背中を見上げて、
「犯罪なんですよ、犯罪。今の三号棟に部外者を入れるだなんて……」
「ああ犯罪だ」米倉が、振り返りもせずに告げた。岩石みたいな硬い声質だった。「犯罪だろうさ、犯罪犯罪」
米倉は惣菜の一種のように犯罪を連呼した。
「それがわかってらっしゃるなら、どうして？」
米倉は、答えない。南を眺めて嫌な含み笑いなど浮かべていた。
「こんなことは今からでも止めるべきです」
「八木クンはこの件にはノータッチということでいい」
八木は、米倉の台詞にたちまち安堵の表情を見せた。が、そうあからさまに表情を変えるのもどうかというものである。米倉が向こうを向いていてくれてよかった。
「……私は私の身を案じているわけじゃないんです。三号棟に入れられるモデルのことや、副所長、あなたのことを……」
「影山智博が研究材料を要求している。よこさなければ三号棟に充満したウイルスを外に漏らすといっているんだ。あれが外に漏れだしたりすりゃ、君も俺やモデル野郎の身を案じているどころじゃなくなるだろうぜ」
「私は拒否するべきだったと思います」
米倉はハッと、八木に背を向けたまま笑い飛ばした。
「責任のないヤツはなんとでもいえるさ。拒否すりゃどうなったと思う？　影山は三号棟の空調を止めるぜ？左腕がそこらじゅうを駆けずり回ることになるんだぜ？埼玉県民の左腕が、な。ひどい景色さ。ちょいとばかし見てみたい気もするが」
「私は影山先生が本気でそれをするとは思えません」
「んじゃ、本気かどうかいっぺん試してみるか？」
「だいたい空調を止められたぐらいなら、まだ対処のしようもあるはずです」
「いいか、三号棟は研究棟だ。壁を噴っ飛ばすぐらいのクスリはたやすく調合できるだろうし、んなもの調合しなくてもそこらにプロパンガスが転がってることだろうぜ」
「……影山先生が建物を噴っ飛ばすとおっしゃるのですか？」
「その気がありゃいくらだってできるってのさ。ついでに最近の影山の台詞を聞いてると、どうやらその気がありそうだ。野郎は俺たちが野郎の研究活動の支援を止め

れば、たちまち野郎の研究課題を外へ撒き散らすつもりなのさ。そうなりゃ後は、……すべてがおわっちまうってだけの話さ。全部一辺に片付いて、かえって清々するだろうぜ」

告げて空笑いした米倉の背後に、八木は草臥(くたび)れたため息を漏らした。

「……しかし、……せめて身内の人間を感染モデルに使うべきだったんです」

「身内の人間？」

「たとえば、影山先生の研究の手伝いにこちらから送り込んでいる連中です」

「サポート隊か？」米倉はそれもまた傑作と高笑いした。「連中もたいへんだな、てめえの血が実験に使われるのを手伝わにゃならんとは」

「たしかに、彼らにこれ以上注文をつけるのは、酷といえば酷なことです。連中は三号棟に出入りするだけですでに神経をすり減らしているでしょうから」

「七十人を葬った殺人ウイルスの海を、ゴムなんぞ着て泳ぎながら、だからな」

「しかし、それでも何も知らない部外者を巻き込むよりはマシなはずです。どうしても感染モデルが必要だったのなら、ここはサポート隊の面々に頭を下げるべきだったのです。こちらが真剣に頼めば、連中も引き受けてくれたことでしょう」

「ま、そうかも知らんな。……とすりゃ八木くん、君明日からサポート隊に入ってくれるか？　ＬＨＶの感染モデルは、君に決定だ」

八木は途端に狼狽(うろた)えた。しかし彼は、急に態度を翻すのも卑怯と思ったか、あるいは米倉の台詞は口先だけだと踏んだのだろう。こう告げた。「……いいでしょう。私がなって済むのであれば、私は感染モデルになりますよ」

米倉は八木の決意を笑い飛ばした。口先だけだったのだ。「立候補にゃ感動したが、実はそういうわけにもいかんのだ。感染モデルは部外者でなければならない。というのも、……この先の話は、八木くん、君は聞かんほうがいいだろう」

八木はしかめっ面して、米倉の横顔を覗き込む。「……どういうことです？」

米倉は暗がりに浮かぶ南棟のシルエットを直視しながら、憎々しげに笑っていた。「聞きたいのか？　聞いちまうと君まで踏み台のひとつになるぜ？」

「……踏み台？」
「君はこの件にゃノータッチさ。俺のやることにぐだぐだ文句垂れて、せいぜい口先だけでも善人ぶってりゃいい。俺は君を気軽な無責任野郎などと罵ったりはしないさ」
「無責任ったって、私は……」八木が小さく呟く。「……私はただの、逃げたチーフの代行ですよ」
「俺は逃げた所長の後釜だ」
舗装路を風が駆け抜けた。二人の頭上で、惨めなパームツリーがあおられて騒いだ。米倉は視線を落とした。夕立にえぐられた中央分離帯の土肌を眺める。いったん伏せた視線は、なかなか上がらなかった。
「あ」かわりに舗装路の南を見上げた八木が、ぽつりと呟いた。「来たんじゃないですか？」
米倉は視線を上げた。南から、三菱のセダンのヘッドライトが揺れながら迫ってきた。米倉は咳払いを連発して気分を変える。ポロシャツの襟を整えて手を挙げると、三菱はスピードダウンし、二人の前にアイドリングして止まった。
「……連れてきたんだな？」米倉が運転手へ、明言を避けて尋ねた。
「はい」
米倉は後部座席を覗く。スーツの男の隣に、アルファベットのロゴの入ったTシャツを着た、うすらでかい青年が座っていた。やせ形で、狭い後部座席に窮屈に膝を折って納まっている。立たせればおそらく一八〇センチを超えるだろうが、同時にかなりの猫背であることも想像ついた。馬面で、耳が隠れるほど髪をのばしていて、アゴには不精髭が群れていた。色黒なので精悍な顔立ちといえばそうなのだが、眉毛がハの字に垂れていて男前とはいえなかった。
男がこちらを見たので米倉は視線を逃がした。「二人じゃなかったのか？」
「もう一人はもう数日かかるかと……」運転手が答える。
米倉はふうんとうなずきながら、スラックスの尻ポケットから封筒を取り出した。「これを三号棟の見張りに渡すんだ。通してくれるはずだ」
封筒を受け取って、三菱は広い舗装路を北へ遠ざかっていった。
「明治大学の三年生だそうだ」米倉が、三菱を見送りながらつぶやく。「俺は宿無しのフーテンでも拉致してこいって指示したはずなんだがな」

「……ややこしいことになりませんか？」
「なるさ。明大生じゃなくたってな。何もかも好きなだけややこしくなっちまえばいいんだ」
八木はため息をつく。ため息は生温い風に運ばれていった。
三菱の赤いテールランプは、遠く北エリアの研究棟の合間へ消えた。
「……なんだかもう沢山って気分ですよ」八木がつぶやく。
「ああ。もう沢山だ」米倉が同意した。「どうにでもなっちまえ」

「さっきのダレ？」
三菱が再スタートすると、桜雄次はキョロキョロ後ろを振り返りながら尋ねた。
隣の男が鬱陶しげに振り返る。桜雄次の痰を吐くような口調は、この小一時間でもう沢山だった。「ここの副所長さんだ」
「なに？　出迎えてくれたの？」
「そうだ」
「それなに？」雄次は男の膝に乗っている封筒を、かっさらおうとした。
男は慌てて封筒を引っ込める。「こっちの書類だ」
「どっちの書類？」
「キミには関係ない」
三菱は北エリアの研究棟の群れへと入った。七度ほどカーブを折れると、にわかに前方に光が溢れた。
「なに？　草野球？」
研究棟の群れがスコンと開いた。そこは百台でも釣りが来そうなほど広い駐車場になっていたが、車両は一台も見当らなかった。その空の駐車場の奥に、八方からサーチライトを浴びた地上二階建の研究棟、埼玉研究所北エリア三号棟がキングのように佇んでいた。その全身にはすっぽりと半透明のビニールが被せられている。どの窓にも明かりはなかったが、接近すると明かりがないのではなく窓という窓に鉄板が溶接してあるのだとわかった。
建物の周囲二十メートルは、黄色いテープを張った柵にぐるりと囲まれていた。柵の周囲を犬を連れた迷彩服が複数巡っている。三号棟の背後には少し離れてテニスコートが十面程並んでいたが、コートはモスグリーンのトラックの駐車場になっていた。第八コートにはヘリコ

プターさえ見えた。
「何の騒ぎ？」雄次が尋ねる。
答えはなかった。
「軍隊じゃん軍隊」
車内には三菱のエンジン音ばかりが響いた。
三号棟の正面に、建設現場の仮事務所のような掘っ立て小屋があった。小屋はどうやら黄色い柵の内へ進むためのゲートだった。三菱は掘っ立て小屋の前に止まる。雄次がここが終点かと聞いたら、隣の男はうなずきながら車を降りた。掘っ立て小屋から迷彩服が一人出てくる。堅苦しい顔つきをしたその迷彩服は、男から封筒を受け取ると中の書類を眺め回した。迷彩服が書類を見ている間に、封筒を渡した男は三菱のトランクから雄次のボストンバッグを出した。迷彩服は書類のしまいの方に小さくうなずいて納得し、雄次を見た。
「じゃ、降りて」
雄次は三菱を降りた。足元に雄次のボストンバッグが置いてあった。三菱はさっさと走り去った。あとには排気ガスが、強烈なサーチライトの光に青く漂っていた。
「行こう」
迷彩服に促されて、雄次はボストンバッグ片手に掘っ立て小屋に入った。
掘っ立て小屋の内部には、通信機器、ロッカー、スケジュールボード、ボードに張られた指令の山、消火器だか何だかわからないが何かの噴霧器。それらの片隅に、三人の迷彩服が音量を恐ろしく絞って野球中継を見ていた。音量を絞っているのは、上司に見つかると頬を張られでもするのだろう。ロッカーのひとつが半開きだ。覗くと、オレンジ色をしたビニール製のスーツ、ズボン、長靴、手袋、小窓つきの頭巾、それらが脱け殻のように吊るしてあった。
「早く」迷彩服が奥の戸口から急かした。口調が刺々しいのは、雄次がロッカーを覗いたせいだろうか。
奥の扉を出れば、黄色い柵の内側に出た。三号棟までは二十メートル。サーチライトに照らされたアスファルトを、黒い通信ケーブルが蛇行しながら三号棟へ伸びていた。風が吹き寄せて、三号棟を包んだビニールがいっせいにブリブリと泣いた。
「なんでビニール被ってんの？」
迷彩服は答えなかった。通信ケーブルに沿って歩きだした。雄次は少し離れてついていきながら、周囲を見渡した。黄色い柵の外を、迷彩服と犬が足並み揃えて巡っ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com